明日への道標

理想と現実のはざまで
― 福島に原発を立地した木川田一隆 ―

㈱日本設備工業新聞社
代表取締役社長　高倉克也

東京電力の第４代社長・木川田一隆（きがわだ　かずたか）（1899－1977）は原発の導入に真っ向から反対していた。財界の良心と呼ばれ、率先して企業の社会的責任を唱えた木川田は原子力の安全性に強い疑念を抱いていた。

部下が説得をあきらかけたとき、予期せぬ異変が起きる。木川田は一転して原発推進を指示し、生まれ故郷の福島に建設することを決定した。

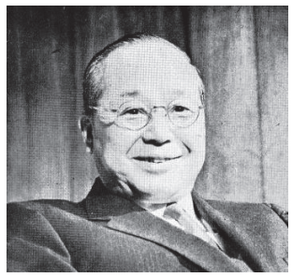
木川田の危惧は後世の東日本大震災によって測らずも的中する。彼が生みの親となった福島第１原発から大量の放射性物質が漏れ出し、国と電力業界が半世紀にわたって強弁してきた安全神話は一瞬で崩壊した。木川田の転向は企業が社会的責任を果たすことの難しさを端的に物語っている。

人間尊重の理念を掲げ、原子力を嫌悪していた木川田はなぜ態度を豹変させたのか。福島の運命を変えた歴史的決断の舞台裏に迫ってみよう。

電力の国家統制に抗して

木川田は現在の福島県伊達市で医者の３男として生まれた。旧制角田中学卒業後、陸軍士官学校の受験に失敗して旧制山形高校から東京帝国大学経済学部へ進学する。

在学中はイギリス古典派経済学の流れを汲む社会政策学を構想した河合栄次郎に師事し、いつも最前列で講義を受けていた。河合は軍部の最盛期にファシズム批判の論陣を張った気骨あるリベラリストとして木川田の思想形成に決定的な影響を及ぼした。


木川田一隆

1926年、卒業した木川田は東京電力の前身である東京電灯に入社する。当時、電気は87％の家庭に普及し、寡占化した大手５社による過当競争が激化していた。1929年の大恐慌、1936年の2.26事件と激動する時代のなかで電力国家管理法案が可決され、1941年に太平洋戦争に突入すると国家総動員法によって電力会社は国家の統制下に置かれた。

戦後は電力の鬼と畏怖された元東邦電力社長の松永安左エ門を筆頭に民間主導による電力事業の再編が進められた。1949年、通産省に電気事業再編成審議会が発足し、会長となった松永の片腕として木川田は将来の電力業界を担う逸材と太鼓判を押された。

1951年、木川田は現在の９電力体制を確立して誕生した東京電力の常務に就任し、副社長を経て1961年、社長に昇格する。1963年、経済同友会の代表幹事に選出され、民間企業の協調的競争を提唱した。「過当競争と国家統制との弊害を身をもって経験した私の結論は、人間の創意工夫を発揮するためには民有民営の競争的な自由企業とすることだった」。木川田は国家の介入を排した秩序ある自由な市場競争を理想としていた。

悪魔のような代物でも

1953年12月、アメリカのアイゼンハワー大統領は国連総会で「原子力の平和利用」をアピールする。翌年３月にはまだ新人議員だった元首相の中曽根康弘が中心となって日本初の原子炉築造予算案を国会に上程し、４月に可決される。

そのころ副社長を務めていた木川田は企画課長から一刻も早い原発開発を迫られていた。しかし「原子力はダメだ。絶対にいかん。原爆の悲惨な洗礼を受けている日本人が、あんな悪魔のような代物を受け入れてはならない」と一歩も譲らなかった。

両者は夕闇が濃くなるまで電灯もつけず押し問答を繰り返した。電気がもったいないと言って木川田はよほど暗くならないと電灯をつけなかった。暗がりのなかで自分自身に言い聞かせるように「原子力はいかん」と呟いていたという。

そんな木川田が突如として原発推進へ傾斜したことに周囲は驚きを隠さなかった。彼自身も最後まで真意は語らなかった。

だが原発推進が国策化するなかで時代の流れを止めることはできないと木川田が最終的に判断したことは当時の状況から合理的に推測できる。戦時中の苦い教訓を念頭に原発を基軸とする電力事業の主導権をふたたび国家に奪われたくないという執念もあったはずだ。

木川田が後継者として期待し、のちに経団連の会長となった平岩外四は「木川田さんはたんなる理想主義者ではありません。理想主義者であると同時に、たいへんな現実主義者でした」と述懐している。理想と現実を秤にかけて木川田はこのとき現実を選択したといっていいだろう。

重大事故の社会的責任

1955年11月、東京電力は木川田のゴーサインを受けて原子力発電課を新設する。翌年、政府は原子力委員会を立ち上げ、初代委員長に就任した読売新聞社社主の正力松太郎を先導役として原子力による産業革命を呼号する国家的キャンペーンを展開していく。1960年１月から官民共同出資の日本原子力発電が茨城県東海村で全国初の商業炉の建設を開始した。

1962年、前年から社長として采配を振るうようになった木川田は役員会でいよいよ福島第１原発の建設計画を打ち明ける。用地は西武グループの創始者となる国土開発の堤康次郎から取得した。巨大な利権に絡んで地元の首長や議員が水面下で蠢（うごめ）いていた。

関西電力の美浜と運転開始時期を競いあった福島第１原発は1971年３月から１号機の稼働にこぎつける。はじめて原子力の火がともったとき、興奮した社員たちは口々に万歳を叫び、日本酒を酌み交わした。

完成を見届けた木川田は同年、10年つとめた社長の座を退いて会長に就任する。日中国交回復に熱心で両国による共同声明の調印に先駆けて訪中し、周恩来首相と会談。1974年、電気料金値上げに反対する不払い運動が巻き起こったときは参院議員の市川房江の要望を受け入れて企業としての政治献金を廃止した。

このまま何の問題もなければ木川田は先見の明のある理想派経営者として燦然と輝きつづけていただろう。だが2011年３月11日に発生した東日本大震災によって栄光の歴史は一変する。福島第１原発はずさんな安全対策で炉心溶融や施設の爆発などチェルノブイリと同様のレベル７に分類される重大事故を引き起こした。

後世のこととはいえ福島に原発を建設した木川田の結果責任は免れない。「これからは原子力こそが国家と電力会社の戦場になる。原子力という戦場での勝敗が電力会社の命運を決める」と原発推進の号令を全社に発した木川田は企業の論理を優先させて「悪魔のような代物」と手を組んだ。それは「企業を原点に社会を見るのではなく社会に原点を置いて企業を見る」という持論と明らかに矛盾していた。

歴史を後戻りさせることはできない。とはいえ木川田が生きて震災後の故郷を見たら、いかなる社会的責任を果たそうとしたのだろう。